

(IV)

また集会にもどるが、黒い時間表が皆の前に出された。「いまか明日の七時までの予定を作りますので申し出て下さい。時間表といっても、むずかしく考えることなく、いくら反社会的になってみたところで所詮、汽車で、または飛行機で二地点間が結ばれるように、古い習慣と新しい破壊が親子であったりする、ただそれだけの理由で……お申し出下さいませ」の説明に、翌朝の七時までは木下、風倉、利根、小杉、小幡、田部、午前二時三十分から同三時までが馬場、長、桜井のトリオで、その他には申し出はなかった。時間表とは関係なく時間に生死のかかった宮崎の存在には相当驚かないわれわれさえ少々ビックリした。宮崎はスコップ（土を掘る道具）を持って参加した。博多の十一月の午後七時はもう真暗だった。それに雨も降っている。あとから思えば、始まった七時ごろから干潮になったのだから、だんだん砂浜は広くなって行った。室内でそれぞれの参加が始まると同時に、宮崎は独り浜に出て穴を掘り出した。背丈ぐらい掘ると潮水が湧くので、次の穴掘りに移らざるを得ないのだ。その「得ない状態」が次から次へと穴を掘らせ、十二時ごろには七つの長さにして十二米ぐらいの穴を掘っていた。暗い穴底で水に浸って懸命に掘っている。波の音だけの誰もいない砂浜。掘り上げた砂は、高く側面に投げだされ瞬間鋭角をつくるが、すぐに雨にうたれて鈍い角になってしまう。

果てしなく単調な作業が続く。それを見ていると穴の暗い底部から、この集会の強行軍的スケジュールの結果として、多くの同志を失った過去が湧きあがってくるのだった。一グループ結成以来幾多の友が参加し、幾多の友が去っていった。歴史を積む程に離合の摩擦は激しく、ちょっとした食い違いの意見すらもが、思想性を含んだ大議論と化し、渡り鳥がシベリアへ去ってゆくように、体質的に、それ等の人々は精神の異国へと逃がれていった。

「馬鹿気たことをやると、画家として一生が台なしになる。まして展覧会でもない集会ごときに命がけでやるなぞ」の言葉だけを残して去る礎石の一つ、一つは、いまは空となり、その跡は悲しみの穴、あるいは絶望の空洞となって重ねられてゆく。これのみが運動の輝かしい成果であるのかもしれない。そんな感傷にはかかわりなく、太古から繰り返し繰り返訪れる波に、その空洞は僅かばかり残り、少ない仲間のみが穴の意味を知らされる博多の「コノ夜」、なおも、この僅かなあと何人が、このカラッポの絶望の美しい穴を構築してゆくだろうか。芸術運動の意味は判らぬが絵画とは、所詮そんなムダ骨おったマイナスの穴でなければ、築くことの出来ない城なのではなかろうか。とすれば、なんと「ワビシイ」城寨であることだろう。このワビシイ穴を宮崎は深夜、現実には掘っているのだ。午前一時頃になると、満潮になったのか水平線が妊婦の腹のようにふくらんで、徐々に穴を浸蝕し始めた。それは、なんと緩慢に見えて迅速なんだろう。潮は完全に穴を沈め、巨大な波が宮崎の全身を洗う。確かに海は母であるのだろう。だが山の上から、即ち安全な場所から、紺碧の波が緑の半島や白い砂浜をセンチメンタルに抱くときのみ、人々は海を母と呼んだのに違

いない。だがこの薄ら寒い、荒れに荒れる玄界灘の波に、頭から洗われて穴を掘る宮崎にとって、それは「母たり得るだろうか」母だとすれば、まさしく性の悪い残酷な継母の様相だ。死を賭けた宮崎の行為は黒い悪魔に犯される少女みたいに愛難的で、海の牙は容謝なく鋭く宮崎をさいなんだ。

そういえば穴とは永遠に攻撃を受けるもの、痛めつけられる肌白い少女「抑圧された永遠の階級」なのかもしれぬ。「ヘコミ過ぎて 孔となった」悲しい母性のみが背後の見透せる見者の資格を得るのだ。

現実の宮崎は、海辺の砂浜に死を賭け、掘る行為によって凹の城を空洞で積み重ねてゆく。これこそが、マイナスの城と呼ぶにふさわしいメスの芸術なのかもしれない。この空洞のみが死を貧婪に喰い、肥えた時間の城と化すことが出来るのかもしれない。宮崎は、その優しさに生まれ、優しさに喰われて死んでゆくのだろう。